

中学校国語科における故事成語の指導について

大栗 真佐美

(京都教育大学附属桃山中学校)

On the teaching of idiom derived from historical events or classical literature of China in the
junior high school language classes

Masami OGURI

2017 年 11 月 30 日受理

抄録：本論文は、中学校国語科における漢文教育の学習において、2009 年から 2017 年現在までの実践授業などを分析し、課題等を考察したものである。これまでも漢文教材内容研究は数多くなされているが、教師自身の内省、自己分析を基に、現在求められている主体的学び・対話を中心とした漢文学習指導法についての構築はまだ少ないといえる。また、教師において中学 1 年が故事成語を学ぶことによって、どのような学びが構築されているのかを把握しながら、指導することは重要である。漢文を苦手とする生徒が多い中、生徒たちが主体となって学び、対話することで漢文に対する苦手意識を取り除く授業づくりを目指す。

キーワード：漢文の学習指導、故事成語、授業実践の変遷

I. はじめに

「今に生きる言葉」(光村図書中学校国語科用教科書『国語 1』1 年(平成 28 年度版)は、「故事成語」を学ぶ教材である。京都市及び京都教育大学附属桃山中学校では国語教科書として光村図書を採用している。この「故事成語」が中学 1 年の教科書に掲載されるのは確認できたところによると、昭和 41 年度版(昭和 41 年～43 年)『中等新国語』において、初めて 1 年で「中国の故事成語」として掲載されている。この「故事成語」は、昔の中国の有名な話に基づいて作られた言葉で有り、今も我々の生活の中に生き続けていることを教えてくれる。短文でストーリー性があり、しかも耳慣れた言葉である「故事成語」は、現在においては、中学校で学ぶ漢文教材の足慣らしの役目を果たしているといえるだろう。

この「故事成語」の教材は、前述の光村図書をはじめ、学校図書、教育出版、三省堂、東京書籍の 5 社全ての平成 28 年度版教科書にも掲載されている。その中で学ばれる故事成語は、上記五社中、五社とも「矛盾」が題材として選ばれている。学習内容として、「矛盾」が上段に書き下し文で書かれ、下段に現代語訳または、訓読文が書かれている。他に教科書に掲載されている言葉として、「五十歩百歩」、「大器晩成」、「備えあれば憂い無し」、「虎の威を借る狐」、「背水の陣」、「推敲」、「蛇足」など普段使っている言葉であり、それが中国の古典であることは、原典である「漢文」を見て初めて気づく生徒も多いのではないのではないだろうか。

先行研究を見てみると、中学校検定教科書の漢文の扱いについて、金井圭太郎(2011)では、「中学校における漢文はほとんどが口語訳を付しており、書き下し文のついていない教材はない。特に中学一年生においては、訓点付き漢文の掲載ですら学校図書一社のみに留まっており、漢文学習＝書き下し文の学習という様相である」と述べている。現行の教科書でも、故事成語の訓読文の全文は学校図書のみであり、漢文(白文)全文の掲載は教育出版のみであった。また、宮城・石井(2015)は平成 27 年度国語教科書 5 社(小・中)の比較検討をしており、指導に当たる際に言語文化の視点から質、量ともに絶対的に不足している教材群のなかで教師の日常的な指導の必要性を指摘している。さらに、澁澤(2017)は平成 18 年度版、24 年度版の 5 社の教科書において 1 年生が「故事成語」(全社が「矛盾」を採用)、2・3 年が「漢詩」と『論語』という変わらぬ定番教材のままであると述べている。

このような中学校検定教科書の現状を踏まえ、これまでの過去の筆者自身の授業実践から課題を見取り、今後の学習指導の改善を目指す。

表ア〈平成 28 年度版教科書教材一覧〉＊は故事成語のみ記載 ＊の横は掲載されている場所

教材	教育出版 五古典と出会う 漢文 故事成語 —中国の名言—	学校図書 4 伝統 —時を超えて 故事成語（漢文）	光村図書 5 いにしえの心 に触れる 漢文 今に生きる言葉	三省堂 古典に学ぶ 漢文 故事成語 矛盾	東京書籍 5 伝統文化に触 れる 矛盾
故事成語につ いて	故事成語とは何 か				
矛盾	書き下し文 現代語訳 原文	書き下し文 現代語訳 訓点付き漢文有	書き下し文 現代語訳	書き下し文 現代語訳 原文	書き下し文 現代語訳
五十歩百歩		書き下し文 現代語訳		* 本文	* 本文 ○古典コラム 意味・由来
大器晩成	訓点付き漢文 書き下し文 意味		* 学習		
有備無憂	訓点付き漢文 書き下し文 意味				
借虎威狐	訓点付き漢文 書き下し文 意味				
助長		* 学びの窓			
漁夫の利		* 学びの窓	* 体験文を書こう		
出藍の誉れ		* 学びの窓			
蛇足		* 学びの窓	* 学習	* 本文	* 本文
断腸の思い		* 学びの窓			
推敲			* 学習	* 本文	* 本文 ○古典コラム 意味・由来
四面楚歌			* 学習		
背水の陣				* 本文	* 本文
訓読法につ いて	訓読法について	漢文の訓読	漢文を読む	漢文の読み方	漢文の読み方

表アは、平成 28 年度版の中学校教科書教材一覧である。ここからは、中学 1 年で学ぶ漢文の導入として、故事成語が採択されていることがわかる。また、5 社全社で、①「故事成語とは何か」という故事成語の言葉についての説明、そして、②「矛盾」という故事成語が掲載されていた。その他の故事成語で書き下し文がストーリー性を持って、掲載されているのは「五十歩百歩」のみであった。

これらの言葉は、現在の中学生にとっては、宮城・石井（2015）によれば、「小学校で学んだ慣用句やことわざ、故事成語が再び中学校で出てくる傾向が強くなる。確かに 5 社のうち、4 社で「矛盾」が扱われ、小学校との重複が見られる」と述べられている。特に故事成語に関しては、平成 28 年度（2016）においては、全教科書が同じ「矛盾」を扱っていることが見て取れる。前述の宮城らの研究に照らせば、生徒によっては既習の言葉であり、宮城の言う通り、非常に限定的な、小規模の言語文化ということになるであろう。

これらのことから、教師は指導する際には、小学校で何が学ばれたのかを確認し、教科書で関心・意欲を高めた後に、発展学習として故事成語に触れる時間を作ることが必要であり、生徒自身が学んだことを使用できる、つまり生徒自身が普段の生活の中で使える生きた言葉となるように指導するという教師側の指導力が求められているといえるだろう。

Ⅱ. 実践の内容

1. 本研究のねらいと方法

(1) 研究のねらい

2009 年から 2017 年現在までの授業実践（授業構想含む）などについて、筆者自身の授業実践等から課題を見取り、今後の学習指導の改善を目指す。指導案を提案する。

(2) 対象 中学校 1 年

(3) 単元と授業構成（平成 28 年度現在の単元名を表示）

単元名 5 いにしへの心に触れる

教材名 「今に生きる言葉」（『国語 1 』『光村図書』）

2. 授業実践の変遷

これまでの授業実践を振り返る、その方法として、これまでの授業実践を授業実践ノート及び作成プリントから課題を見出す。その課題を中心に今後の指導につなげていきたい。漢文教材には大きく変動も無く、指導事項等もあまり変わりはない。この点を考えるとこれまでの授業実践を見直し、今後の指導に役立てることが出来ると考えている。この活動を通して教師自身の内省と、現在の学習指導要領に沿ったよりよい指導案を作成する契機とする。

(1) 2009 年の授業実践

2009 年度の授業ノートからは、在籍の生徒状況（漢字を書くことが苦手な生徒が多く、古文・漢文についての深い理解が難しい）を考えて、生徒の理解が深まるように言葉を平易にし、古典授業（古文・漢文）をまとめを行い、系統立てて教えている。つまり、古典授業を学期に継続して行っているのである。まず、「竹取物語」、「故事成語」、その他の「故事成語」と学習を広げていることが見て取れる。

漢文に使われる言葉、例えば「いはく（いわく）、もつて（もって）」などの語彙をどのように読むのかを指導している。これは、「竹取物語」で既習事項であるから、生徒は理解しやすいであろう。その後は、文字を書くことが苦手な生徒のために、プリント教材を使って現代語訳をさせている。（表イ参照）

表Ⅰ：授業プリントから作成

矛盾	
① 次の語句を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書こう。 アいはく（いわく） イ陥す（とおす） ウもつて（もつて） エ応ふる（ことうる） オあたはざるなり（あたわざるなり）	
② ー線を引いた言葉の現代語訳を書こう。 （楚の国の人）（売る） 楚人に盾と矛とを鬻ぐ者あり。これを誉めて（言った） いはく、 「わが盾の堅きこと、よく陥すものなきなり。」と。 （突き通せるものはない）	
③ 次の書き下し文を、②の言葉を参考にし、現代語訳に直してみよう。 ア楚人に盾と矛とを鬻ぐ者あり。 「楚の国の人に盾と矛とを売る者がいた。」	
これを誉めていはく、 「盾をほめて、」 「わが盾の堅きこと 「私の盾の堅いこと」といったら」 よく陥すものなきなり。」と。 「突き通せるものはない」	

そのあと、教科書掲載の 4 コマ漫画の文字をとり、生徒が内容を理解し順番に並べることができているかを確認している。

(2) 2013 年度

この学年は上記と同じように学習を進めているが、生徒自身の主体的な活動を取り入れ、「今に生きる言葉」の発展学習の時間を取り入れていることが見て取れる。発展学習の内容としては、多くの故事成語に触れさせるために、図 1 のように、短文づくりの前には故事成語の読みの確認、意味の確認などをワークシートで行った。

その後、図 2 のように、資料集を活用し自分が選んだ「故事成語」を書き抜き、短文を書かせた。意味が理解出来ていないと、もちろんのこと短文は作れないので、教師は、学習者が故事成語の言葉の意味を理解して使用できるかが確認できた。

図 2 のプリントには中国の写真などを入れている。その意図は、学習者の学んでいる言葉は中国から日本に伝わり、既に日本語の思考の根底にあるものであり、時代を超えて国を超えて日本語の一部となっており、多くの日本の人々の教訓や、生きる知恵となっていることを知ってほしいという筆者の意図からであった。

このことは、授業の中で中国と日本の言語についての関係について、話を付け加えたことが、メモ書きからわかる。

図 1（読み・意味の確認用ワークシート）

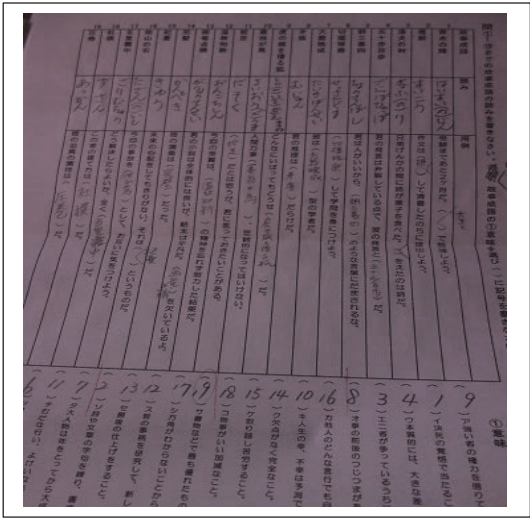
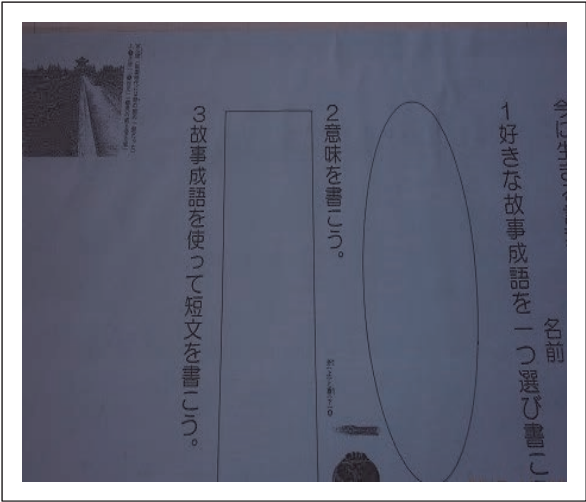


図 2（短文を書いてみよう）



(3) 2015 年度

この年度は生徒の学習意欲も高く、一人学習、グループ学習などを多く取り入れている。また、教員二人での分割での授業であったため、教材などは二人で検討し授業を行っていた。

まずは、漢文の入門時期として、漢文とは何か、返り点と送り仮名についての指導、訓読文を書き下し文にするときの指導を行った。学習者が高校受験をする際に、必要な学校もあることから助詞・助動詞のきまりまで丁寧に授業している。その後、「矛盾」を書き下し文にし、現代語訳をするなどして、教科書教材の定着を図った。さらに発展問題として、「漁夫の利」(『戦国策』)や「守株」(『韓非子』)などの原典を紹介し、漢和辞典を使って現代語訳を試みている。学習者にとっては、原典があることを知り、前後のストーリーを知ることは由来となった故事成語の言葉の理解を助けるものになったといえるだろう。

表ウ：授業プリントから作成

「守株」『韓非子』より	ニ リ ス ヲ	○ 宋 人 有 耕 田 者。	ニ レ ー	書き下し文	・ 宋 人 に 田 を 耕 す 者 有 り。	現代語訳	* 宋 の 国 の 人 に 田 を 耕 し て い た 者 が い た。
-------------	------------------	----------------	-------------	-------	------------------------	------	--------------------------------------

3. これまでの授業においての成果と課題

課題としては、2009 年度の授業実践から見出せる課題は、「矛盾」という故事成語教材に対して時間を取りすぎ、発展学習の時間が少なく、多くの故事成語に触れさせる機会を持てなかったことが挙げられるだろう。故事成語を学ぶのではなく、故事成語で学ぶ生徒の姿は見えて取れない。

2013 年度の授業実践の課題としては、学習者が書いた短文などをもとに、どのような傾向があるのか、またどのような使い方をしているのかなどが教師の手元に残っておらず、検証できていないことである。学習者の理解をその時の振り返りとして見取り、学習者にフィードバックするだけではなく、学習者の間違いやすい点や上手な用例としての的確に分類して保存しておくことも必要である。

2015 年度の授業実践からは、現在の先行研究でも述べられているような実践が行えているのではないかと考えている。数多くとは言えないが、故事成語には原典があることを示し、その原典について自分自身の言葉で現代語訳できたことは、学習者にとって 2 年の漢文学習につなげることとなった。2017 年度に行った、2 年での『論語』の授業では、1 年時に学んだ漢文の決まりや、漢和辞典を使つての現代語訳は多くの説明をせずとも出来、『論語』の発展学習において数多くの『論語』の言葉を学び、「自分に贈る未来の言葉を見つけよう」の授業の際の振り返りを見てみると、自分の言葉で現代語訳をすることの楽しさを知った、たくさんの『論語』の言葉を知ったが、他の『論語』の言葉も知りたいなどの意見が書かれていた。言葉を学ぶ楽しみを知ったようであった。そして、生徒の学びがどのようなものであったか、振り返りや作品などを単元ごとに分類しまとめている。

故事成語教材を通して教師は何を学ぶのか、それは中国の歴史や先人の知恵から生まれ出ていて、それが途切れることなく日本で継続して使われ、学ばれ続けていることであり、学習者に伝承し、美しい日本語を生み出す一つの言葉として伝える必要性だと考えている。

植田(2016)は思想教材の授業作りについて、高校での授業実践の検討を行っているが、「先人の知恵を学ぶ」ということは、思想教材を扱ううえで一つの目標であることは間違いない。だが、文章を読み、「いい言葉だね」「昔の人はこんなことを考えていたのか」「今も昔も同じようなことを考えていたんだね」というある種感傷的な読み取りだけで終わるのはもったいない。一中略一学習者が漢文の思想の文章を読んで、主体的に考えること

が出来る授業に創っていくかが今後の課題となると述べている。

中学校での故事成語の授業と言うことで、高校の授業のような思想教材の深い学びは難しいとは思うが、学習者が主体的に考えることが出来る授業作りはできるだろう。この点も踏まえながら、授業作りを考えていきたい。

Ⅲ. 「漢文学習の学習内容を捉える枠組みについての試案」から授業を捉え直す

1. これまでの漢文指導を捉え直す

2017年開催された広島大学教育学部国語教育学会において、富安（2017）は以下の表エのように、帰納的に漢文の学習内容を検討している。これは2006年から2015年度に発表された漢文教育関係論文において、291本の論文を対象として、それぞれがどのような課題意識に基づき、どのような学習内容・学習方法が提案・実施されたかを整理したものである。

その表を使って、筆者の指導がどのような分類で行われていたのかを分析する。

表エ 2006年から2015年にかけて発表された漢文教育関係論文における学習内容・学習方法

分類	学習内容・学習方法
テキストの理解と再構成	テキストの批評・認識 ① 創作・翻訳・別媒体の表現（2013、2015）
協働的な学習	① 他者との共同・相談（2013、2015） ① 読み広げ・調査・設問・自習、発表・プレゼンテーション等（2013、2015）
漢文テキストに由来する学習内容	① 音読・暗誦・素読、（全年度） ① 漢文への親しみ・興味、（2013） 教科・科目・領域の越境 訓読・文法・慣習の変更 校種間の連携 ① 書き下し文・現代語訳の活用（全年度） ① 漢字・語彙・文章学習、（全年度） 教材選定の見直し（2013、2015） 日本漢文と日本語 ① 訓読・文法に関する知識（全年度） ① 訓読と日本語文化の来歴（全年度）
視点の形成	① 感想・意見・解釈の表現、思考・ものの見方の形成（2015） ① 社会の批評・認識（2015）

上記のように見てみると、年代を追うごとに授業実践における学習内容が増加してきているのがよくわかる。先行研究において指摘されている通り、学習者にとっての学びが教材だけにとどまらず、発展学習などを通して学ぶことにより、これまで学んだ既習の内容が将来とどのように関係があるのかを意識することで、漢文学習の苦手意識を払拭できると考える。

坂東（2010）は、中学生が古典を嫌う理由を明らかにし、この問題点に対して、「既存の知識や教養としての古典を学ぶのではなく、学習者が主体的能動的に学ぶ過程で古典学習の意義を実感し、古典と自己との関わりを意識化する学習のあり方を明らかにする必要性がある」と述べている。前述の植田（2016）においても、学習

者が漢文の思想の文章を読んで、主体的に考えることが出来る授業に創っていくのが今後の課題となると述べている。

この点を踏まえて考えれば、学習者にとって過去の言葉だけを学ぶのではなく、過去の言葉から現在に通じる今に生きる言葉や実用性がある言葉を学び取り、実際に活用できることが必要だろう。

IV. 指導案の提案

1. 指導案についての試案

これまで、述べてきたことをもとに「故事成語」について、どのような授業実践を行うことが可能かを検討していきたい。まず、故事成語を学ぶ上で、1年生に対して指導目標とできる各事項を以下に整理する。

平成 29 年告示の学校指導要領中学校 1 年

〔知識及び技能〕

(3) わが国の言語文化に関する次の事項を身につけるよう指導する。

ア 音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむこと。

イ 古典には様々な種類の作品があることを知ること。

〔思考力・判断力・表現力〕

A 話すこと・聞くこと

(1) イ 目的や場面に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を整理し、伝え合う内容を検討すること。

エ 必要に応じて記録したり質問したりしながら話の内容を捉え、共通点や相違点などを踏まえて、自分の考えをまとめること。

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 紹介や報告など伝えたいことを話し合ったり、それらを聞いて質問したり意見などを述べたりする活動。

イ 互いの考えを伝えるなどして、少人数で話し合う活動。

B 書くこと

(1) ア 目的や意図に応じて、日常生活の中から題材を決め、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすること

(2) ウ 詩を創作したり随筆を書いたりするなど、感じたことや考えたことを書く活動。

C 読むこと

(2) 学校図書館などを利用し、多様な情報を得て、考えた事などを報告したり資料にまとめたりする活動。

これらの学習指導要領の中から、3つの傍線部の事項を中心にした授業を構成するため、まず、指導事項を以下の3つに絞った。

1 昔の日本人が作り出した漢文訓読の決まりを理解し、音読を通して読み慣れ意味を理解する。

2 数多くの故事成語に触れ、その由来や意味を学ぶ際に、原典にも触れる。

3 漢文を通して生徒自身が主体的に他者と交流・対話する学びを行う。

(1) 授業展開

指導の進め方として、故事成語の教材を学ぶことを通じて、学習者にとって過去の言葉だけを学ぶのではなく、過去の言葉から現在に通じる今に生きる言葉や実用性がある言葉を学び取り、実際に活用できること等を意識した指導を行い、学習者自身が考え、グループで対話し、交流する授業としたい。評価は、観察・ワーク

シートを見ていくこととする。

(2) 単元と授業構成（平成28年度現在の単元名を表示）

単元名 5いにしえの心に触れる

教材名「今に生きる言葉」（『国語1』光村図書）

指導事項（知（3）ア・イ）（話（2）ア・イ）

- 1 昔の日本人が作り出した漢文訓読の決まりを理解し、音読を通して読み慣れ意味を理解する。
- 2 数多くの故事成語に触れ、その由来や意味を学ぶ際に、原典にも触れる。
- 3 漢文を通して生徒自身が主体的に他者と交流・対話する学びを行う。

評価規準

【関】 故事成語の意味や由来に関心をもち、漢文の言い回しに読み慣れようとしている。

【話】 現代語訳を参考にして、故事成語の由来と意味を理解して問題を書いている。

(3) 授業の構想（全6時間） 内容理解の時間と発展学習の時間をとっている。

時	学習活動	中学生の活動
1	学習への動機を持たせる。 問1：自分の調べてきた「故事成語」について発表する。 教科書を全員音読する。 問2：「故事成語とは何か」を問う。 振り返りを行う。	目標：故事成語について考える。 自分の調べてきた「故事成語」について発表する。 ・家庭学習ノート 大きな声で教科書を読む。 「故事成語とは何か」教科書の言葉で確認する。 日本と中国の漢文を通した繋がりと、日本人が受容し最高の学問に位置付けてきた歴史等を知る。
2	前時の復習。 問1：なぜ中国語である漢文を、昔の人々は、わざわざ日本語に読み直す工夫（訓読）をしてまで学んだのだろう。 「漢文」の決まりを学ぶ。 振り返りを行う。	目標：漢文の決まりを知り、漢文特有のリズムを味わう。 パソコン室で「漢文」、「訓読」について検索し、答えを見つけ出す。（一人学習） 4人班で交流する。（グループ学習） パワーポイントを用いて漢文の読み方を確認する。 白文、訓読文、書き下し文、返り点などについて説明を聞く。 ワークシートの訓読文を範読した後、全体読みで通読後、ペア読みする。（ペア学習） ワークシートの訓読文を書き下し文にする。
3	漢和辞典について説明する 「矛盾」について学ぼう。 一人学習→ペア学習 これまでの学びを通して、矛盾を読み解こう。	目標；「矛盾」を学ぼう 漢和辞典について学ぶ。 現代語訳は漢和辞典を使用して、自分の現代語訳を完成する。 「矛盾」について、ワークシートを用い、学習者自身が白文から、訓読文、書き下し文、現代語訳を行う。 学習者が書き入れたワークシートについて、ペア学習し、意見を述べる。→教科書を開けて、確認する。

4	発展学習を行う。 9班（4人班）を3つに分け、3つの原文の中から、担当を決める。各班で担当箇所を決め、訓読文から書き下し文に直して、現代語訳をする。	「漁夫の利」、「守株」、「推敲」の原文を班ごとに分ける。 9班（3班ずつ）ワークシート配布 例：訓読を書き下し文にする担当。 書き下し文を現代語訳する担当。 または、1行ごとに担当を分けるなど。
5	その他の故事成語について学ぶ。 パワーポイントを用いて説明する。 教師が準備した故事成語の中から、1つ故事成語を選び、クイズを作る（ペアで話し合っ問題文を1つ作る）。	目標：故事成語について確認しよう。 その他の「故事成語」について学ぶ。 ワークシート 故事成語の意味や例文、書き下し文等から、各自問題文をつくる。
6	故事成語を使って、発表を行う。 ペアで前に出て発表する。 4人班で対抗戦とする。 全問二十問 一番正解が多かった班を表彰する。 故事成語についての感想を書く。 振り返りを行う。	4人班で話し合いながら、ホワイトボードに正答を書く。 （グループ活動） 正答者にはその故事成語のカードを配布される。 故事成語カードを数える。 故事成語についての感想・振り返りを書く。

V. 終わりに

以上のように、これまでの授業実践を振り返り課題を見つけること、現在の漢文教育で求められていることなどを踏まえて指導案の作成を行った。現在の状況等にあわせて検討したので、来年度の生徒状況如何では手直しが必要かもしれないが、この指導案による授業の具現化と成果に期待が持てると考えている。

現在、各学年で学ぶ漢文教材はおおよそ1つであり、国語教科書全体を見ると非常に少なくなっている。過去の教科書などを見ると、古典の授業として、単元全てが漢文であることもあった。先行研究でも述べられていたように、言葉はより多くのことを学ぶことで育成されていくものである。故事成語教材は、5社とも3・4年で学ばれている。つまり、現行の小学校教材で学ばれ、引き続き中学校でも学ばれていることから、漢文の導入には慣れているという点では良いかもしれない。しかし、言葉を育成する視点から見れば、小学校で何を学んでいるのかを把握し、なるべくなら数多くの言葉に触れる機会を持つように授業を構成したい。教科書だけの学びでは、やはり不十分だといわざるを得ない。

そのためにも、限られた時間の中で教員は漢文教材である「故事成語」をどのように指導するか、また、どのように学習者の学びの入り口を広げるかをつねに意識しながら、漢文の世界に興味を持ってもらえるようにしていかなければならない。そして、学習者にとって過去の言葉だけを学ぶのではなく、過去の言葉から現在に通じる今に生きる言葉や実用性がある言葉を学び取り、実際に活用できることが実感できる授業作りを継続して検討していきたい。

VI. 参考文献・引用文献

- 1) 「教科書クロニクル中学校編」教科書クロニクル光村図書出版ホームページ。
www.mitsumura-tosho.co.jp/chronicle/chugaku/index.html (2017年9月28日閲覧)
(昭和30年度版(昭和30年～33年)中等新国語では2年「故事成語」、昭和34年度版(昭和34年～36年)中等新国語では1年「中国の寓話」、昭和37年度版(昭和37年～40年)中等新国語では2年で「中国の故事物語」で掲載)
- 2) 金井圭太郎(2011)『オリジナルテキストにおける漢文の概略—中学一年生の漢文導入期の取り組みを中心に』新しい漢文教育第53号、44-45頁。
- 3) 宮城信夫・石井勉(2015)「我が国のことわざ・慣用句・故事成語の指導について—平成27年度国語教科書会社5社の比較検討を通して—」『教育学部紀要』文教大学教育学部、第49集、103-110頁。
- 4) 澁澤尚(2017)「故事成語教材による系統的漢文教育の試み—「推敲」から漢詩の指導へ—」『言文』福島大学国語教育文化学会、巻64、1-16頁。
- 5) 富安慎吾(2017)「漢文学習の学習内容を捉える枠組みについての試案」2017.812 第58回広島大学教育学部国語教育学会資料より抜粋。
- 6) 坂東智子(2010)「自己との関わりを意識化する古典学習指導の考察—大村はまの単元学習「古典入門—古典に親しむ」(昭和25年)を中心に—」『教育実践学論集』兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科、第11号、83-95頁。
- 7) 石川嘉一(2017)「古典に親しむ態度を育成する中学校国語科の授業づくり—クイズ形式を取り入れた故事成語の学習を通して—」広島大学附属三原学校園研究紀要、第7集、168-173頁。
- 8) 曲璐璐、中村敦雄他(2012)「〔伝統的な言語文化〕の可能性—中学校国語科教材の検討と開発を中心に」群馬大学教育実践紀要 第29号、261-283頁。
- 9) 長谷川滋成(1992)『漢文の指導法』溪水社。
- 10) 浜本純逸・富安慎吾(2016) 植田隆「Ⅲ第1章思想教材を用いた実践」『中学校・高等学校の漢文の学習指導実践史をふまえて』溪水社。